

平成31年度 第5回研修会

平成31年3月24日（日） 於：神奈川県立金沢文庫 参加者55名

## 講演会「集める、受け継ぐ、守る —資料と向き合う学芸員の仕事—」参加記

横浜みなと博物館 奥津 憲聖

2019（平成31）年3月24日（日）、神奈川県立金沢文庫において講演会「集める、受け継ぐ、守る—資料と向き合う学芸員の仕事—」が開催された。この講演会は平成30年度神奈川県博物館協会第5回研修会（3部会合同シンポジウム）として開催され、参加者の半数は加盟館園職員などの協会関係者であったが、残りの半数はそれ以外の一般からの参加者であった。

### 講演会のテーマについて

今回の講演会は博物館が持つ機能のうち、特に「資料の収集・保存」に焦点をあて、4つの館園の事例を紹介するというものであった。博物館が「資料を収集、保存、展示し、調査研究する機関」であるということは、博物館法が定める定義（但し、博物館法では「保存」ではなく「保管（育成を含む）」としている）であると同時に、あらゆる館園に勤める学芸員が共有している認識である。しかし、取り扱う資料の種類には館園ごとに違いがある。例えば、人文・歴史系の博物館においては古文書や絵図、写真などがすぐに想起しやすい資料の形態だと思う。他方、自然史系博物館においては、動植物の標本などが資料の中核を占めることが多いだろう。また、広義の博物館とされる動物園においては生きた動物が「資料」として扱われることになる。そして、資料の種類が館園ごとに違えば、その収集・保存のあり方もそれぞれの館園によって異なってくる。今回の講演会は自然系博物館、動物園、資料館、総合博物館の民俗部門という専門分野の違う4つの館園における資料の収集・保存の実例を一度に知ることができる貴重な機会となった。以下では今回の登壇者4名の報告内容を紹介し、併せて私自身が講演会への参加を通じて感じたことを報告させていただく。

### 講演1「自然史博物館におけるコレクションポリシー」

最初の講演を担当されたのは神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員・瀬能宏氏である。同氏の専門は魚の分類であり、新江ノ島水族館からサメの寄贈があった際の写真などを提示しながら、同館資料の9割以上が寄贈であるご紹介された。一方で、瀬能氏ご自身が海に潜って魚を採集し、現地で標本を作成されることもあるということも鹿兒島・奄美での調査の事例に基づきお話しいただいた。



同館では、自然史科学の基本に則り、比較研究に必要な資料収集を推進していくことをコレクションポリシーとして定めているという。生物種の資料は1種につき1個体あればよいものではなく、同じ生物種であっても、地域差や成長差、雌雄差といった生物学的諸特性の違いがある。さらに比較研究のためには、同じ特性の資料を統計学的に有効な数だけ集めなければならない、このため必要な資料の数は膨大になるという。資料の増加は収蔵庫の不足という事態を招くが、ここで瀬能氏からフロントヤードとバックヤードの面積比を変更するという解決策が提示された。これは博物館の敷地面積や延べ床面積に占める収蔵庫面積の割合が小さいという現状がある以上、来館者が利用できるフロントヤードの部分を減らしても、バックヤードの拡充を図るべき、という提案であ

る。来館者が利用する展示室などのフロントヤードを重視し、博物館の重要な機能を担うバックヤードが相対的に低くみられがちである現状を同氏は「フロントヤード・シンドローム」という言葉で表現した。資料の増加に伴う収蔵スペースの不足という問題はあらゆる館園が現在共通して抱えている課題である。資料をその調査研究結果とともに展示することはもちろん重要であるが、資料の収集・保存という博物館の根幹が揺らいでしまつては、展示も調査研究も満足に行うことができなくなる。フロントヤードを「聖域」とすることを止め、収蔵スペースに転用していくべきという考えは、長年、専門研究職としての学芸員の職務を果たされてきた瀬能氏の経験に基づく極めて現実的かつ有効な提案であると感じた。

## 講演2「キリンはどこからやってきた？～飼育係は生きものと向き合う学芸員～」

続く野毛山動物園の落合絵美氏の講演のテーマは動物園における資料の収集・保存であった。動物園が扱う資料は生きた動物であり、その動物の寿命を超えて展示し続けることはできない。そのため、動物園は動物を常に収集し続けることが必要である。動物の収集には「繁殖」「貸し借り・ブリーディングローン」「交換」「譲受・寄贈」「購入」「採集」などの方法がある。またこれとは別に「傷病鳥獣の保護」や「違法飼育ペットの保護・引き取り」を行う場合もある。落合氏は同園でキリンの飼育を担当しており、今回はアミメキリンのモミジ（メス）が2016（平成28）年に埼玉県こども動物自然公園から移動してきた際の事例をお話いただいた。動物園での繁殖は国内外の動物園と協力して行われる。野毛山動物園では2012（平成24）年にアミメキリンのそら（オス）



が誕生した。モミジはそらのパートナーとしての役割を期待され、埼玉県こども動物自然公園から野毛山動物園へと移動することになったのである。ちなみにキリンの移動は道路の高さ規制の問題もあり1～2歳の時に行われる。講演ではモミジが輸送箱を出て飼育舎へと移るまでの様子を映像でご紹介いただいた。

今回、落合氏のお話を伺って、各地の動物園はそれぞれの地域で社会教育施設としての役割を果たしつつ、飼育下での繁殖による種の保存という大きな使命を達成するため、他の動物園と緊密に連携をとっているということを知ることができた。多くの博物館は館ごとにコレクションポリシーを持っており、資料の収集・保存の段階において他館と連携することは少ないように感じる。しかし、今回動物園の事例を伺って、例えば運営主体の違う館同士でも収集・保存資料の分担を明確にし、必要に応じて資料の移管を定期的に行うなど、地域や社会全体の発展のために最善の選択がとれるよう館同士の連携を進めていく必要があるのではないかと感じた。

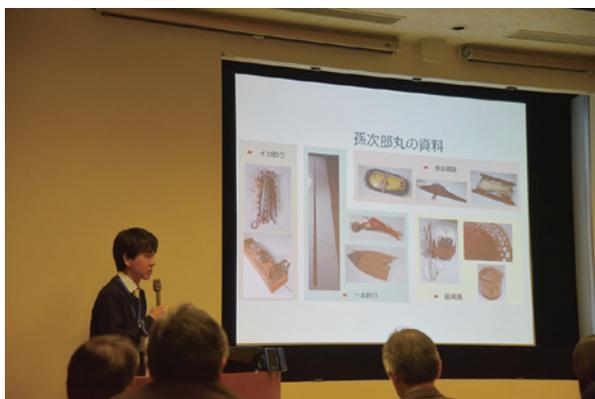
## 講演3「旧家における資料発掘と現地展覧会—横浜市都筑区・中山恒三郎家の事例から—」

3番目の講演は横浜開港資料館の吉田律人氏による事例報告であった。同館は公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団が運営する文書館兼博物館である。今回の講演では横浜開港資料館が、同財団が運営する横浜市歴史博物館、横浜都市発展記念館とともに、横浜市都筑区の旧家・中山恒三郎家の現地調査・資料発掘を行い、さらに現地で展覧会を開催した際の事例が報告された。中山恒三郎家は菊の栽培で知られる旧家で、江戸期から酒類の販売など多様な事業を展開していた。明治期には製糸場を運営する太陽合資会社を設立し、生糸の生産も行っていった。同家の調査は2015（平成27）年の末から2016（平成28）年にかけて行われ、膨大な数の文書と民俗資料が発掘された。また同時期に煉瓦造倉庫をはじめとする建造物の調査も進められた。そして2017（平成29）年4月には同家と同財団の主催により、現地で文書資料と民俗資料の展覧会が行われ、同時に建造物の見学会も開催された。来場者への解説はそれぞれ歴史学、民俗学、建築史を専門とする学芸員が担当した。

中山恒三郎家での現地展覧会は、資料収集の現場が、そのまま展示の場となった事例であった。これは学芸員の職能を生かすことで、資料の収集・保存・展示・調査研究といった学芸活動を博物館の建物の外でも展開できる可能性を示している。また、博物館の建物にこだわらないこそ、館の枠を超えた学芸員同士の連携、さらに地域の関係者との連携も柔軟に実現することができた。一方で、収集した資料を各館で分担して保存し、それぞれ詳しい調査研究を行うようになったあとも、こうした柔軟な連携を継続していけるかという点が今後の課題になるのではないかと感じた。

#### 講演4「収集現場の映像とその資料的価値」

最後は横須賀市自然・人物博物館の民俗担当学芸員・瀬川渉氏から漁撈用具の収集の現場での映像撮影について報告が行われた。民俗資料とは、人の生活を伝えるモノ・コトであり、農具・漁具、職人・商人道具、生活道具、祭礼・信仰道具、家屋、祭礼・年中行事、民俗芸能、家制度、伝説などがこれにあたる。瀬川氏によれば民俗資料が対象とする年代は「現在から追える過去」であり、収集する資料は古い道具だけではないという。今回の報告では横須賀市佐島の孫次郎丸という漁船で使われていた一本釣り、延縄漁、イカ釣り、曳き縄漁などの道具の収集の現場での事例が紹介された。瀬川氏は計3回、収集のため現地を訪問し、寄贈者に道具の名称や使い方を説明してもらった。講演ではその様子を撮影したビデオカメラの映像が上映された。映像の収録時間は合計6時間ほどになる。



こうした映像記録は文字や静止画像では記録できない道具の使い方などの情報を残せるという点において有用である。しかし私は、映像記録は保存と活用という面において課題もあると感じた。瀬川氏によれば、映像記録は現在、同館のスタンドアローンのPCで保存しているという。このような映像記録の安定的な保存は、現在多くの博物館が直面している共通の課題である。もし映像記録を長期的に保存するのであれば、安全性の担保されたサーバーに移し、同時に複数の媒体にも複製して保存する必要があるだろう。だが、こうして残された映像を再生できるソフトウェアや機器が将来も存続しているという保証はないため、最終的には静止画を印刷し、音声を文字で記録してバックアップを取るという対策をとらざるをえない。このように映像記録の保存とその活用には課題も多いが、文字と静止画の記録を補完する補助的な記録として撮影するのであれば、有用な手段であると感じた。

#### おわりに

以上4名の報告内容を紹介し、それぞれの報告について私自身が参加して抱いた感想を述べてきた。資料の収集や保存は、学芸員が日々の業務のなかで体得する経験知としての側面が強く、その活動を改めて言語化するのは難しいことだと思う。今回ご登壇いただいた4名の方にはそれぞれの館園での事例を分かりやすくご説明いただいたので、自館とは館種が違う各館園のお話も興味深く伺うことができた。最初の報告で瀬能氏から「フロントヤード・シンドローム」のお話があったが、私自身、資料の収集・保存が学芸活動の根幹だとは頭で意識しつつも、学芸活動全体のなかでどうしても展示に意識の重点を置きがちだと感じている。今回の講演会への参加を機に、改めて資料の収集・保存というバックヤードの仕事に誇りをもって取り組んでいきたいと感じた。

最後に本研修の講師を務められた学芸員の皆様、ならびに本研修を企画された神奈川県博物館協会の幹事・事務局の皆様の労に感謝申し上げます。

令和元年度 第1回研修会

令和元年5月10日（金） 於：神奈川県立歴史博物館 参加者69名

## 特別展「横浜開港160年～横浜浮世絵～」の見学と講演 研修会に参加して

日本郵船歴史博物館 学芸員 伊澤 薫

令和元年度の第一回研修会が5月10日に開催された。テーマは、神奈川県立歴史博物館 特別展「横浜開港160年 横浜浮世絵」の見学と講演。以下、研修会参加記として、感じたことを交えながら報告する。

### 研修会の流れ

はじめに、特別展「横浜開港160年 横浜浮世絵」を担当した学芸員・桑山童奈氏による講演があり、横浜浮世絵の背景と、展示内容、見どころなどについて解説していただいた。その後、展示会場へ移動、特別展を見学した。

### 講演内容

・「横浜浮世絵」とは何か？

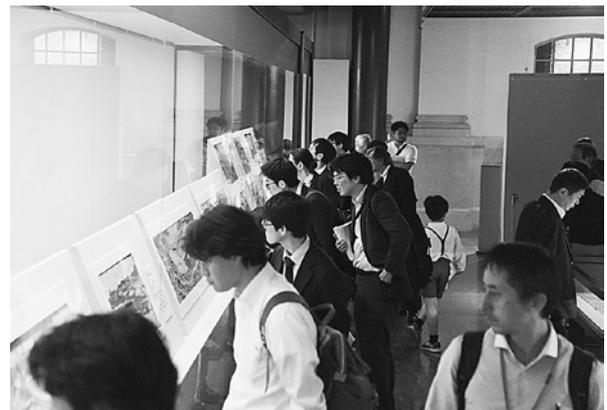
「横浜浮世絵」とは、横浜開港をきっかけに制作・出版が始められた一連の作品群を指す。横浜の街や風景、来日した外国人たちの容姿や生活を描いた浮世絵にはじまり、明治期には、外国の影響を受けた石造建築物、鉄道などが描かれた。しかし、横浜が浮世絵の題材として取り上げられた期間は短かった。世間で“文明開化”が唱えられるようになると、人々の関心、話題は江戸東京へと移り、「横浜浮世絵」は姿を消していったという。確かに、本展の出品リストを見ると、出版年が1860年から1870年代初めの作品が大多数を占めており、この期間、横浜浮世絵が盛り上がりを見せていたのだろうということが理解できる。

現存する「横浜浮世絵」は840点といわれており、作品数としては多く思えるが、桑山学芸員は少ないのではないかとの見方を示した。テーマを絞ったシリーズもの、例えば歌川広重による《東海道五十三次》は55（あるいは56）点、《名所江戸百景》は120点ある。これに対し、「横浜浮世絵」というカテゴリーとして比較した場合、840という数は少ないのではと解説された。視点を少し変えるだけで額面通りではない見解が導き出さ

れる面白さを感じた。

・「横浜浮世絵」の二つの特徴

一つは、水平線や地平線の境目あるいは空に、赤い色をぼかして入れており、非常に鮮やかな印象を与える作品が多いということである。私が所属する日本郵船歴史博物館で常設展示している《横浜式覧之真景》を確認したところ、空と陸地、海の境目から上の部分が赤く彩色されていた。もう一つの特徴は、桜を描いた作品が多くみられるということである。



館内見学の様子

・県博協加盟館2館による企画展

本展の主催は、神奈川県博物館協会加盟館である神奈川県立歴史博物館（以下、県博）と、公益社団法人 川崎・砂子の里資料館（以下、砂子の里）が名を連ねている。横浜開港の周年記念のタイミングに合わせ、3年ほど前から「横浜浮世絵」展の実現に向けて取り組まれてきたとのこと。県博が所蔵する、横浜で貿易商を営んでいた丹波恒夫氏のコレクションと、砂子の里の館長である斎藤文夫氏のコレクションを中心に構成されている。前期（4/27～5/26）、後期（5/30～6/23）でほとんどの作品を入れ替えて、総数330点の展示となる。チラシ等のキャッチコピーでうたわれているように、まさしく「コレクション一挙大公開」の企画展であると思った。

・「横浜浮世絵」の認知度

桑山学芸員の見解では、「横浜浮世絵」というジャンルはマイナーで、他の浮世絵に比べてあまり知られていないとのこと。2014年に江戸東京博物館で開催された大浮世絵展では、「横浜浮世絵」の展示は、1点のみであったという。その会場で「横浜浮世絵」はどのように紹介されていたのか気になりながら、実は私自身もこの研修会で初めて「横浜浮世絵」と呼ばれるジャンルがあることを知ったのだった。桑山学芸員は本展の担当者として、そのような空気を感じていたのだらうと推測した。

本展のあいさつ文には「横浜の歴史を後世に伝える二大コレクター、当館の丹波恒夫と川崎・砂子の里資料館の斎藤文夫の心意気を感じ取っていただければ幸い」とあり、二人の心意気を受け継いで、この企画展を機に、広く「横浜浮世絵」をアピールしていきたいという桑山学芸員の熱意が、講演からも伝わってきた。

特別展「横浜開港160年 横浜浮世絵」を見学して

展示会場は序章に始まり、5つのテーマに分けて構成されていた。

【序章 横浜開港前夜】

「蒸気船之図」「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」など開港する以前の神奈川にゆかりの作品。

【1章 街ができる-横浜開港-】

万延元年（1860）に出版された作品を中心に、横浜港の風景や、遊郭岩亀楼の様子など。

【2章 外国人との出会い】

外国（蘭・英・米・仏・清・普など）の人物画、生活画を展示。

【3章 ヨコハマの明治】

明治以降の横浜の街、名所などの風景画、汽車などが描かれた作品。

【4章 横浜浮世絵の160年】

過去の横浜浮世絵展の図録や、「横浜浮世絵」が使用された切手など、昭和以降の資料類。

展示会場に入っすぐ、無料のミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」の利用案内があった。イヤホンガイドのスマホ版で、アプリをダウンロードすると解説を聞きながら見学で

きる。アプリに対応しているスマホを持っていることが前提ではあるが、解説を聞きながら自分のペースで見学したいお客様にとっては、非常に喜んでいただけるサービスだと思った。また、イヤホンガイドは、特に企画展においては有料貸し出しのところが多いので、無料というのもありがたい。同じく、会場入り口にキャプションの見方（作者・年代・技法）を説明するパネルがあり、展示品への理解の一助となる工夫だと思った。

見学の前に、講演で背景や知識を得ていたため、「横浜浮世絵」の特徴を把握しながら作品を一点一点見ることができた。また、鑑賞のヒントが与えられることで、展示への満足度が上がることも実感した。

こうした興味の扉を開くきっかけにつながる鑑賞のヒントを、どのような形で提供できるか念頭に置いて、今後の展示企画に生かせるようにしたいと思う。さらに企画意図は何か、見る側に明確に伝わるように展示を作っていく工夫を怠らないことが大事であると改めて認識した。

おわりに

2016年に地域情報サイトが配信したニュースで、砂子の里の休館と、開港160年にあたる2019年に「横浜浮世絵」展の企画を進めているという記事を拝見し、今回の特別展を感慨深く思いました。桑山学芸員をはじめ、関係各位のご尽力により実現がなかったものと存じます。

このたびの研修会の企画、運営に携わった協会幹事および事務局の皆さまに感謝申し上げます。今後の研修会も期待しております。



館内見学の様子

令和元年度 第2回研修会

令和元年6月14日（金） 於：神奈川県立大船フラワーセンター 参加者37名

## 「五感で感じる植物in大船フラワーセンター」に参加して

横浜市立金沢動物園 清水竜也

### はじめに

大船フラワーセンターは、2018年度から管理運営をアメニス大船フラワーセンターグループ<sup>1</sup>が行っている。今回が、初めての指定管理者での運営である。9カ月間の休園・園内改修を経てリニューアルオープンとなった当園は、開園して1年と少しが経過した。研修会は、その間の取り組み、施設の改修点を大船フラワーセンター園長の榎本浩さんが、普段行っている園内ガイドツアーを兼ねて説明していただいた。そして研修会のテーマである「五感で感じる植物」の講習を受けた。

### 園内ガイドツアー

ガイドツアーは、園内を1周する中で植物についての特徴を説明していただいた。

入園口付近の大きなクスノキでは、植物の根はどのくらいの広さまで伸びているのかという問題を出された。その他にもスイレン、ハス、ネムノキ、ショウブについてのお話をいただいた。基本的には、身近な植物を題材にガイドを行うことで植物に関心を持ってもらうものであった。また今後の構想として、園内に熱帯原産の植物を導入し、日本でも生育できる環境になりつつあること



を啓発できればとのことであった。実現すれば、現在の環境変化の一つである温暖化を来園者が実感できる取り組みだと思った。

また改修の一環では、肢体障害など身体が不自由な方に配慮したバリアフリー化の実施事例としてエレベーター導入、池を埋め立てて作られた玉縄桜広場のお話をいただいた。

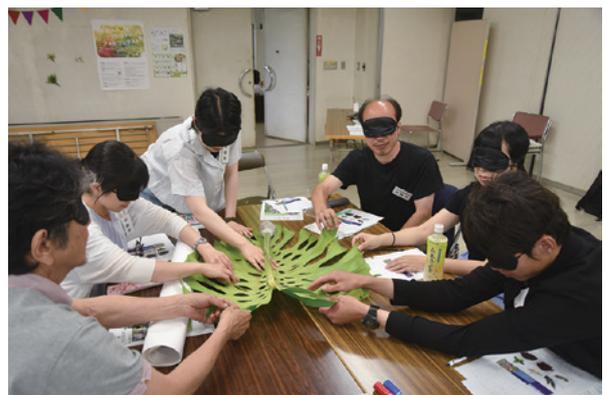
### 「五感で感じる植物」講習

この講習は、視覚障害のある方でも体験を通して植物を知ってもらうものであった。

まずは、嗅覚と聴覚を頼りに植物を判断する体験をした。バニラ、ローズマリー、ミント、カカオ、コーヒーが出てきた。馴染みのある植物だが、視覚に頼りがちな分、匂いと音だけだと別ものに思ってしまう。正確に植物の匂いを知らないと判断に迷いが出る感じであった。

次は触ってみて、どんな植物の葉なのかを描いてみるものであった。触覚だけを頼りすることもあり、目視できないものを触るのに抵抗があった。しかしながら見ないで触るということは、神経が研ぎ澄まされる感覚を味わうことのできるものであった。使用された葉は、モンステラ、ソテツ、バナナなどであった。

最後は、味覚を使用したものだ。目隠しをしてから手の上に食べ物が置かれる。触りながらの実食であった。食べたものは、バナナを乾燥させたものとチップスにしたものであった。よく食べ慣れたものであったが、何を食べさせられているの



<sup>1</sup> 株式会社 日比谷アメニス  
公益財団法人 鎌倉市公園協会  
株式会社 日比谷花壇  
相鉄企業 株式会社

か分からない不安も交じり、変なものを想像してしまうような体験であった。

#### おわりに

大船フラワーセンターには、この研修以前に数回来園したことがあった。研修では、指定管理になる以前との違いを知るいい機会になった。榎本園長が、園内の改修箇所と今後の展望を伝えてくれた。障害のある方も楽しめる園づくりと温室以

外で熱帯植物導入して温暖化が見える形にすることが、これからの大船フラワーセンターの方向性と知れた。ご案内いただいた榎本園長はじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。

今回の研修テーマである「五感で感じる植物」は、視覚障害のある方でも楽しめるというものであった。動物園にも視覚障害のある方が来園される。今回の植物でやったことが、動物でも取り入れていけるかを試していきたい。

令和元年度 第3回研修会  
令和元年10月18日（金） 於：あつぎ郷土館 参加者35名

## 「厚木の新たな文化発信拠点、あつぎ郷土博物館の見学と解説」 参加記

横浜市歴史博物館 司書 古川 恵美

今回の研修は、平成31年1月にオープンしたばかりのあつぎ郷土博物館にて、オープンまでのいきさつやその後の取り組みの解説をしていただくとともに展示見学を行うというものであった。

自分自身は主に博物館内の図書閲覧室を担当しているが、利用者と共に地域資料に触れる中で、「厚木」という県央地域の奥深さに興味を持っていたところである。当館の改修工事に伴う長期休館というタイミングを活用し、近隣地域博物館を自分の目と足で確かめるべく、この貴重な機会に参加をさせていただくことになった。

### 博物館設立までの道のり

はじめに体験学習室で館長の大野一郎様より博物館がオープンするに至った経緯を解説いただいた。

真新しい博物館の歩みは、実は20年以上にわたる紆余曲折があり、そのお話ぶりは様々な思いを含み、しかしながら厚木の地域博物館への熱いお気持ちにあふれるものであったと思う。

厚木市の「教育の森構想」が1980年代に策定され、1988年に博物館基本構想委員会が立ち上がるが、バブル崩壊後に凍結してしまう。当時の委員会の展示構想は、地球規模の歴史を学ぶことから「厚木」という地域の歴史へ、というマクロ→ミクロの構図であったために、トリケラトプスやアルケオテリウムの化石といった厚木とは無関係にも思える資料が収集されていた。その時代は図書館の一部に収集資料が収められていたが、図書館の移動に合わせて1998年に建物を利用した「郷土資料館」をオープンし、地域博物館の活動を推し進めることになる。

その後、民主政権の時代となり、2009年の事業仕分けなどの試練を乗り越えての新博物館計画へと歩んでゆく。

私自身が勤務する職場の図書室には、厚木市立寿図書館郷土資料室の展示図録『相州大山』

(1992年)が所蔵されている。館長のご説明により、博物館の前身の郷土資料館のさらに前身の図書館内郷土資料室での展示図録ということを確認した。新博物館に至る道を、これらの図録からもくみ取ることができる。



写真1 「基本展示室」での解説

### 基本展示・融合展示という展示計画

開催中の企画展「木とくらし～サトの木、ヤマの木、鎮守の木～」を、大野館長に解説いただきながら見学、トリケラトプスの化石標本室を横に見つ「基本展示室」へ移動した。この部屋の計画担当である槐真史学芸員からは、究極の厚木年表作成へのご苦労や、展示業者との意思疎通の難しさなど、実経験に基づく感想もうかがうことができた。

「基本展示室」は、常設展示という言葉ではなく、厚木という地域の基本が分かるという意味で「基本展示」という言葉を使用している点、また、毎年テーマを決めて、分野を超えた展示を行う予定の「融合展示」スペースを中央に持つ点が特徴的な展示方針であった。

「融合展示」は、現在「石」をテーマとして石器や石造物、標本、文書といった資料が露出あるいはケース内展示をされていた。ここで使われているケースは、台の高さ調整やガラス面の取り外

しができ、資料によって展示方法を変えることができる仕様になっている。一年毎に展示替えをする予定とのことであるが、特殊な展示ケースのため、資料の出し入れが若干難儀とのご説明もあった。展示タイトル用のパネルがマグネットで、付け替えが楽にできるというところなども含め、「融合展示」スペースは多くの参加者たちの興味を引いていた。



写真2 融合展示タイトル付け替え作業中

基本展示室は露出展示が主であり、土器や剥製を身近に感じることでできる設計である。しかし、自館も同様だが、特に子供達の利用が多い場合には、展示物に触れてしまう行為は制御できないと思ってよさそうである。石器に触れたりヤセウマを背負ってみたいりできるハンズオンコーナーの活用、あるいは小さな子供達の博物館リテラシーの向上を目指すアクションなどが、さらに期待されるようになるのではないだろうか。



写真3 ハンズオンコーナーにて

## 別棟の収蔵倉庫

資料収蔵庫は建物の2階に分野別に設置されており、湿度調整は日々担当学芸員自らが確認しながら機械操作を行うという。

建物の裏手には主に埋蔵文化財を大量に保管できる収蔵倉庫があり、その大きさに目を見張る。平屋で奥行きが深い収蔵倉庫は、中心に軽トラックが進入できる通路があり、手前左右に事務所や写真室、資料室を持ち合わせ、その先にテン箱が積まれたスチールラックがずらりと並んでいた。そこでは、遺物の確認作業をしているスタッフの方がおられたが、プレハブで空調設備のない、黒色系の外装建物の中では真夏や真冬の作業環境は想像に難くない。博物館の建物と直結してはいないため、倉庫内事務所はほぼ使用せず、結局博物館の建物内で調査をすることが多いそうである。建物間の搬入搬出も、天候に左右されることもある。使ってみると案外・・・な事は往々にしてあるとはいえ、多くの博物館がうらやむような収蔵スペースが建物に隣接して確保されていた。



写真4 収蔵倉庫

## 文化発信拠点たらん

博物館はすべからく文化発信の拠点であろう。厚木の新たな拠点には、展示室へ向かう前段階にも様々な発信ポイントが設置されていた。参加者が最初集った体験学習室は民俗芸能の公演も可能だという。国指定重要無形民俗文化財である相模人形芝居の公演などを見越しての設計だろうか。今後の活用が楽しみである。

エントランスホールには、展示ケースが4つほど置いてあり、次月から始まる連続講座「虫めぐる姫君たち」の講師の絵本原画などが関連展示として紹介されていた。外気の影響も受けやすい場

所のため、エアタイトケースの使用で美術作品展示条件をクリアしたとのことである。

一角には、「こもれび図書室」という図書コーナーで昆虫の絵本や図鑑を手にとることができたり、市民の方からの寄贈昆虫標本の一部を展示していたりと、積極的にホールを活用している様子を見ることができた。



写真5 エントランス展示

受付事務室ではオリジナル「あゆコロちゃん」グッズや厚木の文化財を商品化したものも販売しており、ほっこりとする空間が利用者を和ませる。緑の中庭が見える開放的な建物の作りにも、市民を受け入れるオープンマインドな精神を感じることができ、文化発信拠点として親しみやすい導入部分が作り上げられている。

本厚木駅からバスで30分と、アクセスが決して良いとは言えない下入川の地は、鎮守の森から菁莪小学校、神奈川県青年の家、厚木市の自然園と、代々人々に愛されてきた場所、自然にあふれる場所であったそうである。厚木の歴史や文

化、自然を深く知ってもらうための博物館の設置場所として最高、最適の地だということは訪れてみれば実感することができる。

行政、業者、内部調整など粒々辛苦の結晶といえる新博物館だが、1月のオープンから3ヶ月目には入館者1万人達成と、既に多くの市民が訪れているという。歴史的な地で、市民に愛される場＝あつぎ郷土博物館が定着しつつあるのであろう。

私の拙い文章では説明し切れていない部分も多々あることをご容赦いただき、協会の皆様にはぜひ積年の思いが溢れる新しい博物館を訪れていただきたいと願い、この参加記を終えたい。

最後に、10月12日に関東を直撃した台風19号の通過間もなく、協会担当の方々には各施設の状況を把握することもままならぬ中、研修会を遂行していただき、誠にありがとうございました。そして、厚木愛、地域博物館愛にあふれる大野館長、槐学芸員、館員の皆様、ご準備いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。



写真6 博物館全景写真